

## 日本語表記に必要な仮名文字の考察

氷田 作治

(光風)

スイス人のトゥルーティ・マドウツツさん（女性）が、自己体験に依って「漢字学習の一考察」を私との共同研究の名において発表している。漢字圏以外の外国人にとって、漢字習得ということは、たいへんな難関であろう。このことは、常日ごろ頭中を往来していたことではあったが、そのきっかけはなく、現在に至っていたのである。しかし実際に当面したトゥルーティさんは、多くの留学生のための一助ともなればとの念願から、この研究に取り組んで来た。

私も、文字学習や文字指導の専門的立場から共同研究を引き受けた。結果的には、本誌に示された程度にしか仕上がらなかった。しかし、これを手始めとして、

今後さらに進んで、より効果的な研究の成果を目ざす端緒ともなれば幸いである。

そもそも、ゲルマン系の彼女が、このようなことに取り付かれたのは、スイスにおいて「柔道」の試合をまのあたりに見て、身長や体重に関係なく、ずばりずばりと投げているのを不思議に思うだけでなく感動したという。それで日本にやっけてきて、現在、柔道四段の有段者である。本年は五段に挑戦中との事である。

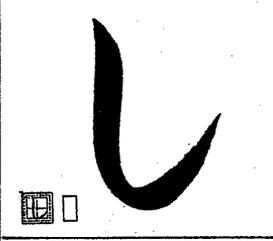
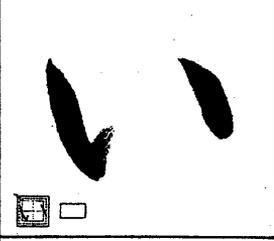
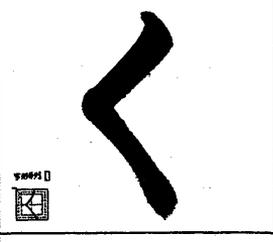
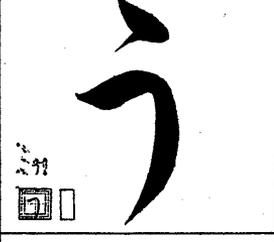
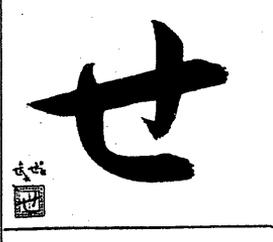
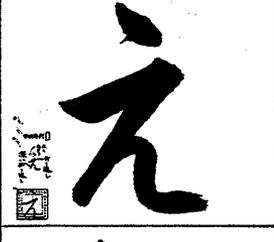
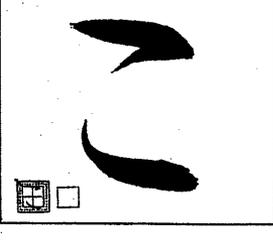
そのみならず、「書道」に興味を持ち、最近は、平安中期の仮名古筆にも関心を寄せている。先般、とある書道展に「寸松庵色紙」の臨書を出品し、優秀な成績を修めている。もちろん、表装も純日本的な茶掛の姿

であることも附記しておく。

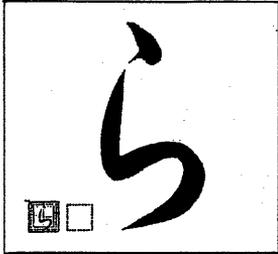
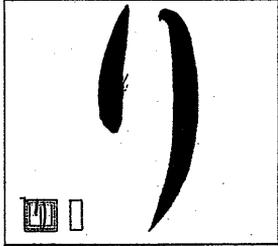
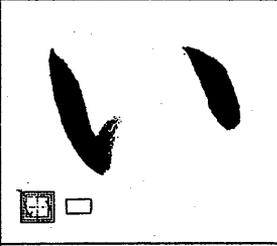
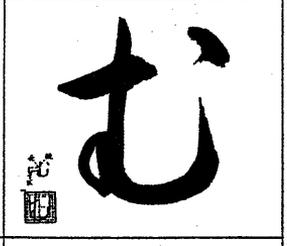
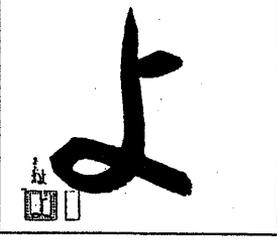
さて、「漢字学習の一考察」により、仮名文字の重要さは、それよりもっと必要性が高いのではないだろうか。漢字については、中国三千年の文字の歴史の中で、種種様な形式や考え方にたつて、書体、書風、書論をはじめとして、変遷史、文字学的なもの、説文学などの研究結果が残されている。

なお、我が国においても、漢字に関する研究や論文が比較的多いが、仮名に関するものは、比較にならないくらい少ないといえよう。平安時代の仮名についてはいろいろと論ぜられているものもないではないが、特に近時、国際的に急発展をしている日本語の「平仮名」については、皆無といっても過言ではない。

そこで、限られた紙面で、許される範囲内で、平成における平仮名の標準の姿を示し、その平仮名字形の整え方のポイントについて図示した。紙面の都合で意を尽くさない点は免れないとしても、急を要すると思うので、未完のまま掲載したことをおことわりしておく。



わ ん

る

う

ゑ

を

平假名  
 なにぬねの  
 はひふへほ  
 まみむめも  
 やいゆえよ

片假名  
 ナニヌネノ  
 ハヒフヘホ  
 マミムメモ  
 ヤイユエヨ

平假名  
 あいうえお  
 かきくけこ  
 さしすせそ  
 たちつてと  
 なにぬねの  
 はひふへほ  
 まみむめも  
 やいゆえよ

片假名  
 アイウエオ  
 カキクケコ  
 サシスセソ  
 タチツテト  
 ナニヌネノ  
 ハヒフヘホ  
 マミムメモ  
 ヤイユエヨ

らりるれろ  
 わるうゑを  
 ん

フリルレロ  
 ワルウエヲ  
 ン

がぎくげこ  
 ガギグゲコ

平假名  
 ちりるれろ  
 わるうゑを  
 ん  
 がぎくげこ  
 さしすせそ  
 だぢづでど  
 ばびぶべぼ  
 ぱぴぷぺぽ

片假名  
 ラリルレロ  
 ワルウエヲ  
 ン  
 ガギグゲコ  
 サシスセソ  
 ダヂヅデド  
 バビブベボ  
 パピプペポ

同じ年の十月、東京松成堂発行の  
 「小学校用挿画新字典」の表から

B

明治33年8月21日付の官報に  
 のっている第一号表

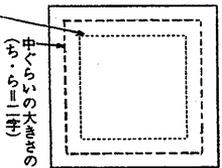
A

も わ ゑ  
 め ろ ゑ

 <p>短△ 長△ ○ △ ○</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>
 <p>中 長○ 短△ ち ち ち ち</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>
 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>
 <p>深折返し て て て</p>	 <p>△ ○ ま せ せ せ</p>	 <p>短△ 長△ け け け</p>	 <p>○ △ 長 短 △ 長</p>
 <p>小 と と と</p>	 <p>深折返し 折返し そ そ そ</p>	 <p>小 こ こ こ</p>	 <p>長 短 △ お お お</p>

(左下の解説について)  
 小さくなり過ぎて、解説の部分がわかりづら  
 いと思う。実物はこの約三倍の大きさのものを  
 縮小したものである。  
 正方形の外・中・内の三わく中・中が中くら  
 いの大きさ・内側は小さい仮名と考えてある。  
 左下の説明のところの□□はその外形を示す。  
 あとは特に留意しなくてよいことを示す。

(一) 小・中・大の仮名  
 (二) 小・中・大の四文字





か	お	え	う	い	あ	あ ー し
か	お	え	う	い	あ	
か	お	え	う	い	あ	
カ	オ	エ	ウ	イ	ア	
カ	オ	エ	ウ	イ	ア	
し	さ	こ	け	く	き	
し	さ	こ	け	く	き	
シ	サ	コ	ケ	ク	キ	
シ	サ	コ	ケ	ク	キ	

つ	ち	た	そ	せ	す
つ	ち	た	そ	せ	す
つ	ち	た	そ	せ	す
ツ	チ	タ	ソ	セ	ス
ツ	チ	タ	ソ	セ	ス
ね	ぬ	に	な	と	て
ね	ぬ	に	な	と	て
ね	ぬ	に	な	と	て
ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	テ
ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	テ

す  
ー  
ね

ほ	へ	ふ	ひ	は	の	の ー や
ほ	へ	ふ	ひ	は	の	
ほ	へ	ふ	ひ	は	の	
ホ	へ	フ	ヒ	ハ	ノ	
ホ	へ	フ	ヒ	ハ	ノ	
や	も	め	む	み	ま	
や	も	め	む	み	ま	
や	も	め	む	み	ま	
ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	
ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	

れ	る	り	ら	よ	ゆ	ゆーん
れ	る	り	ら	よ	ゆ	
れ	る	り	ら	よ	ゆ	
レ	ル	リ	ラ	ヨ	ユ	
レ	ル	リ	ラ	ヨ	ユ	
		ん	を	わ	ろ	
		ん	を	わ	ろ	
		ん	を	わ	ろ	
		ン	ヲ	ワ	ロ	
		ン	ヲ	ワ	ロ	

# 字形の整え方

## (一) 字形の要素

字形を整えてきれいな文字を書きたいというのは万人の願いであり、コミュニケーションの基本である。

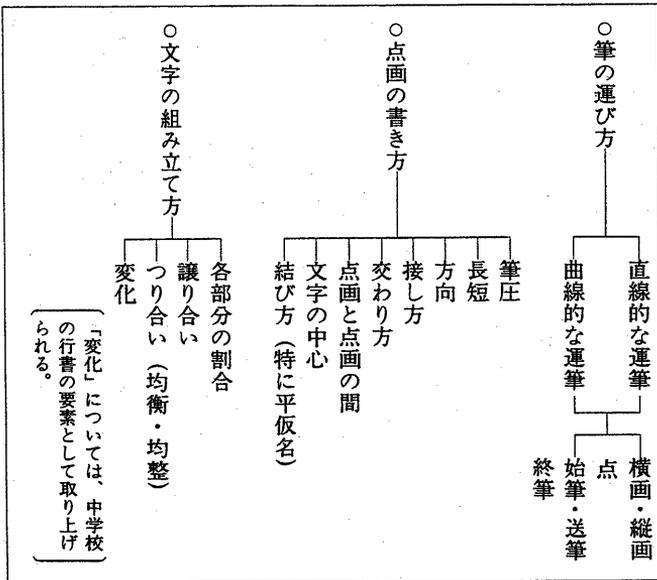
小学校国語科書写の主たるねらいは、文字を正しく整えて書く能力や態度を養うことであり、その指導の内容は、学習指導要領国語の各学年の内容の「言語事項」として示されている。しかしその表現は、指導要領という性格から極めて精選されたものになっている。

例えば、

- ・毛筆を使用して、文字の中心、画と画との間などに注意しながら、文字の形を整えて書くこと。(第四学年)
- ・毛筆を使用して、文字の組立方に注意しながら、文字の形を整えて書くこと。(第五学年)

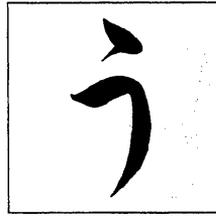
などと示されている。実際の指導にあたって、指導の効果を高め、書写力を確実に身に付けさせるためには、字形を整えて書くためのポイントを、児童の書写力の実状に即して具体的に示しておくことが大切である。字形を整えて書くためには、まず第一に筆の運び方が大きく関係する。筆圧のかけ方と筆の運び方の違いによって字形は大きく左右される。さらに、点画の長短、交わり方、接し方、方向、画と画の間、文字の中心などに注意して書くことによって字形は整ってくる。また、偏旁冠脚の組み立て方や筆順なども文字の形を整えて書くための大事な要素である。したがって、文字の形を整えて書く力を養うには、こうした字形の整え方の要素を具体的に、構造的に示して効果的な指導を工夫することが大切なのである。字形

の整え方の要素を、筆の運び方、点画の書き方、文字の組み立て方の三つの視点から構造的にとらえると次のように考えることができる。



(二)平仮名の字形の整え方

① 点の位置を遠くに離す。

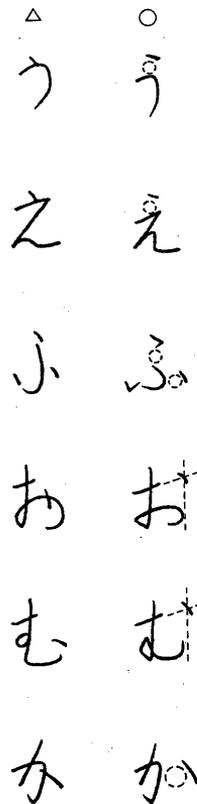
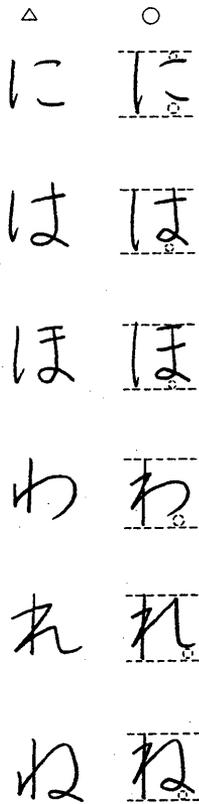


点には、最初に書く場合、途中に書く場合、最後に書く場合の三種類があるが、このいずれも、次の画や、前の画との間を広くあけると形が整う。

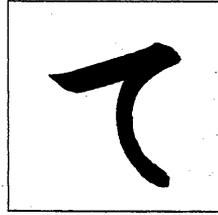
② 縦線を長く書く。



第一筆めが縦線の平仮名は七文字あるが、そのうち、「け」を除く六文字は縦線を長く書くとき字形が整う。(平仮名の場合、第一画、第二画とは言わず、第一筆・第二筆という言い方もある。)



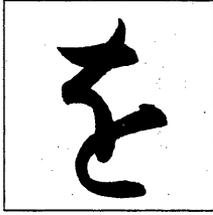
③ 「折れ」「折り返し」は  
しっかり折る。



平仮名は曲線的であるから、「折れ」「折り返し」の書き方に注意しなければならない。めりはりをしっかりつけることで文字に締まりが出てくる。

て であひみゆん  
て る ひ み ゆ ん

④ 下の部分を狭く書く。

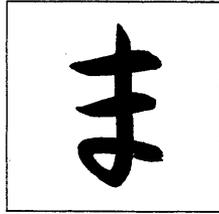


草書体

下の部分を狭く書くと、字形が整う文字がある。「と・せ・を・さ・き・そ」である。これらは、字源である「止・世・遠・左・幾・曾」の草書体からきている。

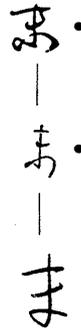
と せ を さ き そ  
と せ を さ き そ  
と せ を さ き そ

⑤ 二つの結び。



平仮名の結びには大別して二種類ある。すなわち、大きな結びと小さな結びである。これは、平安時代に書かれた文字を見れば明らかである。書写では、大きな結びを三角結び、小さな結びを平結び、またはリボン結びなどと呼んでいる。この二つの結びの違いは例示のような字源からきている。

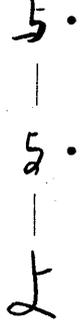
大きな結び



① 大きな結びの書き方



小さな結び



① 小さな結びの書き方



なお、教科書「書き方」では、右のように厳密な区別をしないで、小さな結び（平結び）の書き方一種類で指導している。

■楷書に調和した平仮名

や 也 筆脈を続ける。  
 ら 良 小さく  
 よ 与 平結び 方向を変える。  
 ち 知 狭く 長く  
 い 以 筆圧を軽く。  
 ま 末 三角結び 長く  
 む 武 結び 点を高く。  
 た 太 狭く 垂直に  
 り 利 平結び 長く  
 ろ 呂 筆圧を軽く。  
 け 計 中心  
 う 宇 点が左に寄らないように。  
 れ 礼 中心 狭く  
 ぬ 奴 中心 平結び  
 は 波 平結び  
 ふ 不 2, 3, 4  
 る 為 小さく結ぶ。 曾 深く折り返す。  
 そ そり 狭く 長く 三角結び  
 る 留 狭く 長く 三角結び  
 に 仁 強く突き返す。  
 こ 己 横に広がらない。  
 の 乃 筆圧を軽く。  
 つ 川 狭く  
 を 遠 狭く 三角結び  
 ほ 保 三角結び  
 え 衣 狭く  
 お 於 狭く 三角結び  
 ね 衤(衤の俗字) 狭く 三角結び  
 ね 和 狭く 三角結び  
 へ 部をつくり 角ばらせない。  
 て 天 深く折り返す。  
 く 久 角ばらないように。  
 な 奈 狭く 三角結び  
 か 加 筆圧を軽く。 狭く  
 と 止 狭く

○毛筆に関連付けて書くようにさせる。

あさきゆめみし  
よたれそつねならむうるのおく  
いまはにほへとちりぬるをわか  
やまけふこえてあさきゆめみし  
ゑひもせす(ん)



「いろは歌」は、平安時代に作られた七五調の歌。平仮名四十七文字を重複しないようにつづったものなので、昔から仮名の手本として使われてきた。

中心

あ さ き ゆ め み し

安 折り返し 短く

左 短く

幾

大きく曲げる。

小まめに

女

長く 結び

美

之 角ばらない。

恵 比 毛 世 寸 无

2 3 1 2 3 2 3

結び

折り返し

「以・呂・波……」は平仮名の字源。「あ」「ゑ」は歴史的仮名遣いに使用。

■行書に調和した平仮名

連続

や 也

連続

長

少しそらす

ち 知

連続

以

連続

ま 末

三角結び

点を高く

む 武

太

わり

る 呂

け 計

字

礼

礼

奴

奴

平結び

波

は 平結び

連続

ふ 不

る 為

く 首

そ 留

深く折り返す

る 留

長

に 仁

こ 己

乃

の 川

つ 速

を 速

保

保

三角結び

え 短く衣

お 於

お 於

称(禰の俗字)

ね 和

和

丸く

へ 部のつくり

て 天

く 久

な 奈

三角結び

か 加

広

止

連続させる

○楷書に調和する仮名に比べ、筆使いをゆるやかにして行書に調和させる。

○毛筆に関連付けて書くようにさせる。

あひもせずん



「いろは歌」は、昔から仮名学習の手本によく書かれてきた。漢字を交えて書けば次のようになる。  
 「色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為の奥山  
 今日越えて浅き夢見じ酔ひもせず」

いろはにほへとちりぬるをわか  
 よたれそつねならむうるのおく  
 やまけふこえてあさきゆめみし

あ  
 巨患  
 あ安

あ  
 右肩をあまり上げない。

ひ  
 比  
 折り返す。

さ  
 さ左  
 短く

も  
 連続  
 も毛

き  
 筆幾  
 短く

せ  
 せ世  
 1 2 3

ゆ  
 ゆ由  
 短く

す  
 すす  
 ↓

め  
 少女  
 右肩をあまり上げない。

ん  
 ん  
 深く折り返す。

み  
 み美

し  
 し之

【参 考】

仮名の成立

○仮名の種類

①「万葉仮名」

万葉集の表記に用いられる仮名。漢字の音・訓を借りて、表意文字としての機能を脱し、日本語を表記するのに用いられた。

②草体仮名

万葉仮名を草体に書きくずした字體。仮名の機能の最大の特徴ともいえる表音文字として用いられた。

③女手

草体仮名をより一層省略、簡素化した形の文字で、現在の平仮名につながる。

④平仮名

女手のことであるが、明治三十三年文部省官報により、一音一字の原則をたてて選ばれた四十八文字がこれに当たる。

⑤変体仮名

女手と呼ばれるものには一つの音にそれぞれ字源が異なる複数の文字（仮名）が存在した。それらの総体から前項の文部省が選定した四十八文字を除いた仮名群を変体仮名と呼んでいる。

なお、現在の書道仮名作品にはこれらが平仮名と併せて多様に使用されている。

⑥片仮名

主として寺の僧侶達が教義、教典などの講義を受ける際に、そのテキストの傍らに加える注記やメモのためとして、漢字の一部分だけを表記する形で発達した表音文字である。

なお、現在の片仮名は平仮名と同じく明治三十三年の文部省官報によって定められた。

仮名と呼ばれるものの種類をまず列挙したが、それぞれの成立の経過がそのまま仮名の成立の変遷をたどっているといえよう。ここでは主に、現在の四十八文字の平仮名に至るまでを参考として述べてみる。

漢字がわが国に伝来し、以来、日本語の文字として次第に定着していくわけであるが、当初は表意文字としての漢字の性質を活用した漢文としての表記がなされていた。しかし、日本語の助動詞などの表記までを含め、言文一致の記述をするためにはどうしても音だけを表す文字が必要とされた。

平安朝以前の遺跡から出土した銅鏡や剣の中にも、その銘文に漢字を借りて和名を記したのも見つかつてはいるが、平安朝初期の数十年間はまだ漢文全盛の時代であった。

仮名が表音文字としての機能を持ち、盛んに用いられるようになったのは、菅原道真の進言により遣唐使が廃止され、それによって当時の生活様式の多くが国風化の風潮を見るに至った背景があつてからであらう。

万葉仮名は漢字の意味に関係なく、単にその音や訓を借りて表記するものであった。ただし、完全に一字一音となっていないものもあり、その点では平仮名とは多少性質の違いもあった。（「鴨」↓「かかも」助動詞など）また、漢字そのものを書くのは回数も多く手間がかかる。草体仮名はその煩雑さを解消するために簡略化されていた字體である。

平安中期になると、一層、草体仮名が簡略にされ優美さが加わった女手と呼ばれるものになっていった。当時、男子は漢文や漢詩を学

